Japanese association of educational psychology

助数詞付与のルールはどのように獲得されるか

内田 伸子　今井 むつみ
（お茶の水女子大学）（慶應義塾大学）

【問題】ラベルの獲得がカテゴリー理解にどのような影響を及ぼすかを検討するのに助数詞は格好の素材を提供する。内田・今井（1992年）は、幼児期後半までには助数詞を付けて数えるることがが付与されるようになるが、［頭］を習得した5歳後半～6歳前半にかけ大きさを手がかりにして［羽］を付与すべき対象（例．駝鳥）にも般用する現象が見られた。これは5歳半頃から助数詞の付与規則（大きい－［頭］の連合）を抽出して、大きさの次元で同一のカテゴリーに属する対象に一貫してあてはめようとしたものと推測される。この過程を明かにするため以下の仮説を検討する。**［仮説］①複数の事例を同一助数詞で呼ぶという経験があれば、基準を明示的に教えられなくても規則が抽出される。②規則の抽出は5歳後半頃から可能になる。**

【方法】実験計画；2年齢（4歳児・5歳児）×3条件（基準明示・模倣再生・統制）の2要因計画，各要因独立。

被験者；匹と頭の区別がつかない4歳児（m:4歳11カ月，r;4:7～5:3）・5歳児（m:5歳9カ月，r;5:7～6:2）各30名，計60名を，男女半々，WPPSIの下位検査で認知発達の程度が等質な3群に分け，呼び分け基準を明示する「**明示群**」，正しいラベルを模倣させる「**ラベル群**」，自発的に数えさせる「**統制群**」に割り当てた。

手続き；プリテスト→訓練（2種・訓練無し）→ポストテスト→1週間後テスト（転移課題を含む）を実施した。

【結果】(1)助数詞の付与得点；①条件毎の得点；［匹］・［頭］（**Fig.1**）・［その他］毎に，繰り返しのある3要因の分散分析を行い下位検定を行った結果，［匹］［頭］共，条件の主効果，年齢の主効果，年齢×条件の交互作用，テスト時期の主効果のいずれもが有意であった。

②転移課題（Fig.2）；2要因の分散分析を行った結果，条件の主効果，年齢の主効果，条件×年齢の交互作用のいずれもが有意であった。①②の下位検定の結果，5歳児の明示群とラベル群，4歳児明示群では他の条件に比べ，得点が高いことが見いだされた。また，5歳児はラベルの模倣再生の経験があれば自発的に規則を抽出できるが，4歳児は抽出不可能であることが明かになった。

(2)駝鳥の過般化（表1）；「頭」の過般化は明示群の4，5歳児とも起こるが、ラベル群4歳児では起こらない。

(3)理由づけの多様性（表2）；ラベル群では多様な理由づけを用いており，そのプロトコル（**表3**）を比べると，5歳児は、適切次元へ着目していることがわかった。

【結論】助数詞を付与ルールは，1回and/or何回か経験するだけで抽出される。付与範囲は知覚的類似性に基づいて決めるが、語彙獲得初期と同様の般用が見られる。

Fig.1a "TOU" task (4-year-olds)

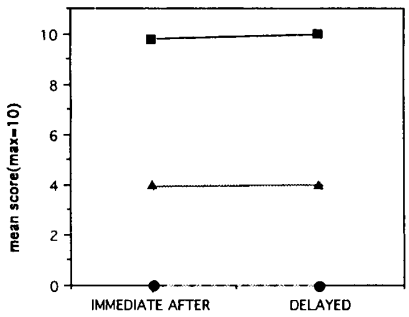
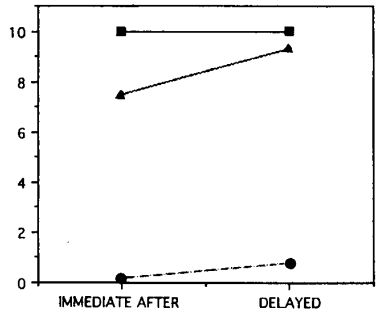


Fig.1b "TOU" task (5-year-olds)



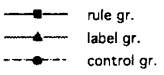


表1　駝鳥への過般化

	明示群	ラベル群	統制群
5歳児	9	8	0
4歳児	10	2	0

（10人中の人数）

表2　理由づけの多様性

	明示群	ラベル群	統制群
5歳児	0	7	0
4歳児	0	7	0

（10人中の人数）

Fig.2 TRANSFER task

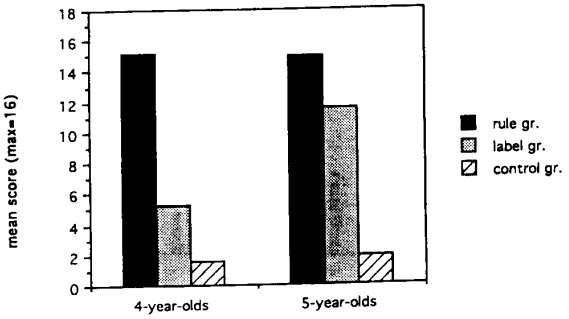


表3　ラベル群の理由づけのプロトコル例

5歳児	4歳児
でっかいから	お目々が黒いから
角が伸びて、鼻が伸びててでっかい	お顔が似ているから
尻尾が長くてでっかい	2頭だから
大きくて幅が大きいから	象だから
大きい動物だからだと思う	お馬だから
背が高いから	動物だから
首が長いし背が高くて大きいから	覚えてたから
おっきめだから	おっきい方が1頭、2頭だよ
大きくて強そうだから	おっきいもん

NII-Electronic Library Service